ルアンパバーン世界文化遺産地域仏像修復プロジェクトの現状とラオスに残る仏教信仰

木　村　中　一

１．はじめに

身延山大学国際日蓮学研究所（前・東洋文化研究所。以下、研究所と略す）は、池上要靖教授や柳本伊左雄特任教授をはじめとする研究所所員・客員所員・研究員と身延山大学仏像制作修復室（通称「工房」。以下、工房と略す）の研究員・研究生・学生が中心となり、平成12年よりラオス人民民主共和国（以下、ラオスと略す）ルアンパバーン県世界文化遺産地域において、当地区に点在する仏像の修復活動（プロジェクト）を行っている。このプロジェクトの成果は、まず平成23年２月に、過去10年で修復された仏像（全14体）を中心展示した「修復仏像展覧会」をルアンパバーン国立王宮博物館で開催したことをはじめとし、平成24年より発刊している『のみおと』などで広く一般に公開している。また記念式典も行っており、平成23年に行われたプロジェクト10周年を記念した式典は、横田順子駐ラオス日本大使ルアンパバーン県副知事をはじめ、日本からは深沢尊明前・日蓮宗静岡県中部宗務所長、伊藤佳通 BAC 仏教救援センター理事長、吉田永正身延山大学客員教授、そしてラオスの関係各機関、ルアンパバーンの僧侶など総勢100名を超える来賓を招き、また多くの参加者によって盛大に挙行された。これは日本・ラオス両国における数多くの人々の後援があってこそのことであり、横田氏の「10年を超す国際協力プロジェクトは貴重で重要な存在」という温かい挨拶文は本プロジェクト関係者のその後の活動に大いなる励みとなった。

また平成25年２月にはルアンパバーン世界文化遺産地区ヴィスン・ナラート寺院において、日本・ラオス両国の僧侶合同による「修復事業継続記念大法要」が厳修され、この法要は修復事業の継続を祝すと同時に、本プロジェクトに関わる全ての人々に対する感謝の意を表明するものとなった。その詳細を記せば、日本

出発の前々日からの関東を中心とした記録的な大雪のために、一時は日本からの飛行機が飛ばない可能性が指摘される中、北山本門寺貫首 旭 日重狼下を団長に、またラオス世界遺産参拝団を始めとする多くの人々が無事にラオスまで到着することができたことは幸いであったといえよう。法要はルアンパバーン仏教連盟の僧侶50人以上による読経から始まり、続いて旭 日重猊下を大導師に、また浜島典彦身延山大学長を副導師に、さらに日本のラオス世界遺産参拝団17名による読経がヴィスン・ナラート寺院の御宝前に奉納され、岸野博之在ラオス日本国全権大使、ブンサノン情報文化観光省美術工芸局長をはじめとする数多くの来賓や現地住民をはじめとして、政府関係者や本プロジェクトスタッフら100名を超える参列者で、堂内は溢れんばかりの盛況内に円成することができた。

このように書き表せば、順風万端の中でプロジェクトが遂行されていたようであるが、実際はプロジェクト発足当初より、問題山積みであった（筆者は本プロジェクト開始当時は参加しておらず、このように書くことに申し訳なさを感じる）。今回、平成28年度プロジェクトに参加した筆者が、現地で調査した本プロジェクトのこれまでの概要と、平成28年度プロジェクト参加経験を基として調査した成果などを中心に少しく記してみたい。

2．ラオスの歴史と仏像群の状況

ラオスは東南アジアのインドシナ半島に位置する共和制国家で、首都はヴィエンチャンである。本プロジェクトの活動舞台である世界文化遺産地域のルアンパバーンはラオスの旧首都であり、日本でいえば京都のような古都である。

ラオスの歴史をみると、一言でいえば「苦難の歴史」であったといえる。それは様々な王国の建国と滅亡、フランスによるラオス植民地化やベトナム戦争、そして独立戦争と内戦と、長きにわたっての「戦乱の歴史」であるといえ、これらの動乱を経て1975年に現在のラオスが建国されたのである。このような戦乱の歴史でラオス人の身心は疲弊し、いわずもがなラオス国中における文化水準は低下していった。それに伴い、信仰の対象である仏像を制作修復するという、ラオスに伝わる「ラオス仏制作修復の伝統的技法」は途絶えてしまったのである。

ラオスでは男子のほとんどが一度は出家し僧道生活を送った経験を持つ。その理由は諸説あるようだが、男子を出家させることにより親が功徳を積むことができ、さらに息子にとっては最大の親孝行であるとの考えがあるからだという。現在でも老若問わず多くの僧侶が朝早く隊列をなし、托鉢を行じている姿をみることができ、ラオスの人々の生活に仏教が根付いていることを感じずにはいられない。このように生活に仏教が根付く、信仰が息づくラオスにおいて、これらの生活文化と反比例するように仏像は朽ち果てていったのである（また盗難などの被害も多数有ったであろうと後の本プロジェクトの調査によって指摘される）。そのような状況下でラオスにおいて活動を行っていたBAC仏教救援センターから「ルアンパバーン世界文化遺産地区に安置される仏像群の破損が著しい」との一報を身延山大学は受けたのであった。これこそが本プロジェクトの出発点である。

柳本特任教授に当時のことについて聞くと、「ルアンパバーン世界文化遺産地域に安置される仏像ということで、何らかの処置が施されているのかと想像していたが、いざ現地に赴くとその現状は想像を絶していた」と語る。現地に赴き、いざ現地にて修復を始めようにも修復設備はおろか、一体何体の仏像が地域内にあるのかさえわからず、現地のラオス政府関係者に尋ねても把握していなかったという。本プロジェクトはそのような状況下、このラオスに伝わる仏像を何とかしたいという想いからスタートしたのであった。

まずプロジェクトを進めるにあたり、予備調査として仏像の個体数及び現状調査が必要不可欠であるとの結論に達し、早速行動を起こした。まずは仏像個体数を調査するわけであるが、ルアンパバーン世界文化遺産地域には36の寺院があり（国立王宮博物館も含む、この理由は後に述べる）、その寺院群に安置される仏像調査を始めてみると、その数の多さと破損状況に言葉を失ったという。仏像の虫損破損は著しく、多くのものは無造作に置かれていた。台座の破損はいわずもがな、仏頭の飾りの多くも欠損しており、螺髪などは仏頭から剥がされていた。これらの多くは信者などが仏の利益や加護を願い、持って行ったのではないかと現地の寺院関係者は語った。ここにもラオス人の心の疲弊、何かにすがろうという救済を願う心情が見て取れる。

その後、なんとか数量調査を実施する段階には入れはしたが、そのような仏像

を目の前に参加者の多くが驚かされたのは、ラオスにおいて仏像を修復する習慣・思想が皆無であったということだった。仏像調査を行うと確かに何らかの修復を施した痕跡は確認できるものの、それは微細であって、修復とまでいえるか疑問が残るほどのものであったという。

ラオスでは信仰の対象をそのまま置いておくことを良しとしているのか、文化の違いなのかと、仏像に対する考え方の違いに苦慮することもしばしばあったが、ラオスの人々との交流や寺院僧侶などとの意見交換によって「これは仏像を決して蔑ろにしていたのではない。ラオスの歴史がそうさせたのだ。人々は仏像を大事に伝え守ってきたのだ」との結論にたどり着いた。先にも記したが人々の信仰は今もラオスに根付いている。それはラオスの文化からもわかることであった。しかしながら、近年における内戦と国家変革の中で、仏像や信仰は継承されても、それを修復する技術や思想の伝承はなされなかったのである。敬虔な仏教徒であるラオス人の多くは、仏像が壊れてゆくことに深い悲しみを感じていた。しかし、実際には修復する術が絶たれている現状で人々は「自然なことで仕方が無い」と自らの心に折り合いをつけていたのである。本プロジェクトによる初期調査に参加した研究生・研究員は彼らの心に触れる度に、非常に切ない思いがしたと語っている。

３．仏像修復の実施と研究

いざ、修復の段階に入っても問題山積みの状況が変わることはなかった。先にも述べたように、ルアンパバーン世界文化遺産地域の仏像修復は、施設整備から技法・材料の研究調査、また材料入手方法などをどうするかなど、クリアしなければならない課題が次から次へと噴出する。まさに手探りの中での修復開始であった。

予備調査を終えた本プロジェクトは、平成13年９月にラオス情報文化省と協定を結び、修復活動を本格開始する。ここで、その到達点を明確化し作業効率を上げるため「伝統技法と文化の再興」と「ラオス人に対する技術伝承」の２点にその目的を絞ることとなった。しかし最重要事項である修復に関する技術が失われ

ており、また技術者もいない。そして、そもそも未だ活動拠点が定まらず、肝心の物資も不足している。このように全てが揃わぬ中、これらの状況と反比例するように参加者はラオスの人々との交流の中で仏像修復の必要性を強く実感していったのであった。その理由はどこからか仏像修復の話を聞きつけたラオス人が、我々に仏像修復の依頼をしに、わざわざ足を運んでくれたからであり、これをきっかけとして多くのラオス人が本プロジェクトに興味を示し始めたのである。これを機として本プロジェクトが本格始動したといっても過言ではない。

修復活動は、調印翌年のヴィスン・ナラート寺院安置仏像１体の修復をスタートとし、その材料や制作工程などの調査から三次元測定の準備段階による研究によって飛躍的に進行していった。

この頃になると修復作業と並行して行っていた、予備調査段階から本プロジェクト成功の鍵となる「目録（リスト）作成」にメドがつき始める。このリスト内容は全仏像の全体写真、寺院ごとに安置される個体数と種類、各仏像の推定制作年代と保存状況を解る範囲で載せたものであった。このリスト作成には実に６年の年月を要し大変な労力を費やしたが、この作業を本プロジェクト参加者と、この時期から定期的に協力してくれるようになったラオス人スタッフとで行ったことにより、互いに必要不可欠であった連帯感と信頼関係を築くことに成功し、良好な関係が育まれる結果となった。

様々な調査が遂行していく中で、現在のラオスでは伝統的な仏像制作は皆無で、「セメントによる仏像のみが細々と行われているのみ」とのことが判明する。また周辺国であるタイやミャンマーなどからラオスに伝わる鋳造仏像とは異なる仏像が流入し、各寺院の須弥壇上はまさに玉石混淆状態であったという。仏像の選別作業を行うとその中で元々安置される、いうなればラオス古来の仏像は玉や漆喰（パタイフンなど）、鍛金や樹脂などによって作られており、過去には様々な製作様式で仏像製作がなされていたことをつきとめられた。その調査結果を基とし修復方法の痕跡を調べると、ペンキで塗られていた例を除くとそのほとんどは修復の痕跡は確認できず、ここで日本で行っている修復方法を使用する可能性を模索したが、これも全体像の数パーセントしか実行できないことがわかった。まさに手探り状態で、ヴィスン・ナラート寺院などとの長きにわたる話し合いにて、ラ

オスの宗教的価値観が損なわれない方法で、また万一不備が見つかった場合は再度修復を行うとして修復記録を残していく（この記録はラオス政府にも提出しているという）ということで合意に達した。具体的にその方法の一端を記せば、欠損部分を中心的に復元し、古色をつけて仏像の時代的古さを現代に残す。またその材に関していえば、当時使用されていたものを使用することは勿論のこと、現在それが無い場合は元材に近しい材を特定し、それを使用するというものであった。当然といえば当然の方法ではあるが、修復技法などが判然としない状況においてこの方法ですら困難を極めた。修復作業と同時並行して材を探しに行く、市街には売っているはずもなく、山林を分け入り材を探すという気の遠くなるような作業の繰り返しが本プロジェクトの成果へとつながっていくのであった。

修復作業がラオスにおいて認知されていくと、徐々にではあるがラオス人の参加も増えていった。またヴィエンチャン国立工芸大学からの協力も得られ、これにより目的の一つであった「ラオス人に対する技術伝承」が遂行できるようになっていった。プロジェクトによってもたらされた調査結果を基とした修復技術は柳本特任教授をはじめとする参加者によってラオス人参加者に教授されていき、その中でも作業のリーダーとなる人物も現れはじめた。さらにこの頃になるとヴィエンチャン国立工芸大学の講師陣をはじめとする修復技術を修得した現地スタッフの手により、その作業効率は飛躍的に躍進し、わずか１ヶ月ほどのプロジェクト実施期間に十体近くの仏像修復が可能となるほどであった。現在では現地ラオス人の修復スタッフを身延山大学へと招聘し、工房にて技術の向上を目指して研修している。この研修事例を挙げると平成25年１月に実施した研修ではラオス国立工芸大学講師、パイワン・タマボヴォンサー氏を招いて山梨水晶彫刻組合の協力の下、玉仏像の制作技術指導を行った。

平成24年のプロジェクトでは、初めて世界文化遺産地域外からの修復依頼があった。参加者はラオス国中でようやくプロジェクト内容が理解・賛同を得たと感慨一入であったという。この内容とはブロンズ製の仏像修復であり、遠くサムヌア地方からの依頼で重さ約50キロの仏像を村長自らが10時間の山道を運転し修復場まで運び込んだのだった。仏像の姿を見ると、首は折れ所々壊れてはいるが当地において大切に奉安されていたことがわかった。軌道に乗ってきた本プロジェク

ト参加者はこの依頼によって気持ちを新たに修復活動に従事したという。

４．仏像の種類と修復方法

ラオスの仏像には様々な種類が確認されている。本プロジェクトによって判明した仏像の種類と、その修復方法について極めて一例ではあるがここに紹介したい。

・木造仏

最も種類が多い仏像は木造仏である。木材の豊富な当地において木造仏が主であることは当然であるが、制作しやすい反面、材が木であるため破損しやすく当時の状況を今に残すものは数少ない。しかし戦乱の歴史にあったラオスにおいて徹底的な破壊にあわずに仏像としての体をなしている現状は大変幸運であったといわざるを得ない。材の種類はカリン種に属するマイドゥ、香木としても使用されるマイチャン・ホーム、チーク種であるマイサック、当地独自の木材マイパオが主に使用されている。これらの材は現在伐採禁止となっているものが多いが、数少ない残存材を使用し修復を行っている。また亀裂や破損部分は麻布をカモクにて貼り付け補強を施した後、表面をカモクにて整える修復補修を主として行っている。さらに深い欠損が確認された場合は同種材にて補足を施し、カモクにて下地を盛った後に表面を整えている。

・パタイフン仏

パタイフンとは日本でいえば「漆喰」であり、パタイフン仏はいうなれば塑像に該当する。ラオスでは仏像以外に須弥壇がパタイフン製であったり、柳本特任教授によればコテ一本のみで装飾物である龍（ナーガ）を作成していた事例も確認されている。元々パタイフンには強度があり、様々な用途に使用される。このパタイフンのレシピは本来、砂と漆喰などを複雑な配合によって作られてものをいうが、現段階においてその正しい配合などは特定できていない。これに対し現在のパタイフンは石灰を主成分とするため、セメントに近しいものとなっており、実際にわずかな修復の痕跡がみられるパタイフン仏には現在のセメントによって破損部分が補修され、その上からペンキが塗られていた。

パタイフンにはパタイプンカオという類似した材が存在しており、このパタイプンカオは砂と石灰を主成分とする。外見上ではパタイフンと類似するが強度が著しく低い。また同様の材でパタイペットがあるが、これはパタイフンより強度があるとされる。このパタイフンやそれに類するパタイペットに関しては現在疑義が多く残っており、今後の調査研究に解明が期待される。

5．平成28年度プロジェクト概要

ここで平成28年度仏像制作修復プロジェクトの概要を記したい。現在、本プロジェクトの主な活動地はラオス第二の都市で、メコン川とカーン川との合流地点である古都ルアンパバーンであり、この地の王宮博物館（旧、王宮）の一角に修復室を構えている。この王宮博物館には堂宇が併設されており、この堂宇内には地名・ルアンパバーンの名前の由来となった「パバーン仏」が安置されている。このパバーン仏とルアンパバーンの関係を少しく記せば、この地の王となったファーグムの后であるクメール出身のケオ・ケーンカンガーが敬虔な仏教徒であって、その影響で王もまた仏教で王国を治世するようになった。ここでクメールより黄金の仏像が送られたという。戦乱のラオスにおいて、幾度となくこの黄金の仏像は持ち去れるのであるが、その度にこの地へと遷座され、現在の王宮博物館併設堂宇内に安置されているのである。このような数奇な運命を持つ仏像は後に「パバーン仏」と呼ばれ、ラオス国の最重要仏の一つとしてラオスの人々の信仰を集めている。

この場所にて、平成28年度プロジェクトは平成29年２月14日より３月８日までの計24日間にて行われた。筆者が参加したのは本隊から遅れること６日の２月20日～24日までの５日間であった。

プロジェクトの１日はミーティングから始まる。このミーティングはまず各参加者（日本人スタッフ・ラオス人スタッフ共）による「チーム」が前日に行った作業内容とその工程を発表し、当日の作業予定を述べる。何でもそうであるがプロジェクトでは情報共有が大切であり、各自の作業方針が正しいのか皆で検討することがこの段階の大切な目的となっている。ここで発生した問題は持ち越され

ることなく、方針が決定するまで徹底的に話し合われるのである。この次に行われるのが、年度プロジェクト予定が現在どれほど遂行されているのかの現状把握である。このように綿密に行われるミーティングがプロジェクト成功の鍵を握っているといっても過言ではない。

このミーティング終了後に各チームに分かれ作業を行うのであるが、ここで今回行われた作業内容を簡単ではあるが記したい（本稿執筆にあたり各チームの№付けを私におこなった）。

・チーム１

ルアンパバーン県仏教連盟の会長・オンケオ師の寺院に荘厳する依頼修復仏を制作。この仏像はコーフォン（ラオスにみられる仏像と同形態。両手を下げている）で制作されている。現在ラオスにて制作される仏像形式は、いうなれば適当でラオス風の仏像様式というのは失われつつある。この依頼仏はルアンパバーン世界文化遺産地域仏像修復の経験で培われた技術（仏像様式の知識や技術など）を基として制作されており、最終的には仏像全体に金箔を貼る予定で、煌びやかなものへとする。本来ルアンパバーンの仏像の多くも金箔が貼られ、また七宝や象嵌装飾が施されており、まさしくこの形態に近づける努力がなされている。これは現地においてラオス風の仏像形態を伝える目的、また金箔の技術を現地に伝えることを目的としている。

・チーム２

ルアンパバーン世界文化遺産地域に点在する寺院に安置される仏像を現地の技術者（ラオス人スタッフ）と共に修復。現在はヴィスン・ナラート寺院の仏像を３体修復中である。現在来ている仏像は比較的新しいもので、17世紀前後のものではないか推定される。

・チーム３

ジル・エマ・ストロースマン身延山大学講師を中心に、失われたラオス古来のパタイフンやパタイペット技術のレシピを探る。オリジナルのレシピは現在、口伝にて伝承されており一様ではない。これら多くの口伝などを基として様々な原材料を比較検討しながら、最もオリジナルに近しい、強度のあるパタイフン・パタイペットのレシピを検討している。

・チーム４

日本から持ってきた根付け（日本型）の原型や外型を作成。原型・外型完成後、蜜蝋にて蜜蝋型（ブレンド）を作成。これをベースとして鋳造（蝋型鋳造）を行い、鋳造の技術をラオス人と共に学びながら技術継承を行っている。

６．ルアンパバーン世界文化遺産地域の寺院

筆者はプロジェクト参加中、ルアンパバーン世界文化遺産地域に点在する諸寺院の一部に赴き、その寺院の様子などの見学を行った。ここで各寺院とそこでみられた仏教遺蹟について少しく記したい。

・王宮博物館

王宮博物館は先にも記したが、ランサーン王国（後期）時代の王宮でありルアンパバーンの都市名の由来となったパバーン仏が安置される堂宇が博物館敷地内に存在する。寺院として該当するかについては疑義が残るが、ユネスコの資料などにも寺院カウントされているため今回ここに記載する。実際に朝夕にはこの堂宇に参拝する人々がおり、パバーン仏に対する信仰は現在も根強く残っている。博物館内は、歴代の王に関する資料と遺物が展示され、当時の栄華と王国の滅亡がパネルなどによって知ることができる。

・ヴィスン・ナラート寺院

ヴィスン・ナラート寺院は本プロジェクトのメインとなる寺院で、最も多くの仏像を修復している。また平成25年にはこの寺院において記念法要が厳修され、これよりも重要な寺院であるといえる。現在は本堂内天井の金箔修復を行っており堂内は騒然となっていた。今回確認すると破損著しい仏像は須弥壇の後ろに回され、修復された仏像は全面に配置されており、どの仏像が修復されたのかを簡単に知ることができた。

・アハム寺院

アハム寺院の特徴的な部分は仏教とともにラオス特有の民俗信仰「プニュ・ニャニュ」が祀られているという点である。プニュ・ニャニュの伝説はいくつかのバージョンが存在する。諸説中において同様に語られるのが、蔓が大きく伸び太陽が遮断されたために実りを得ることができず破滅を迎えそうになる人々のために犠牲になったのがプニュ（偉大なるじいさん）ニャニュ（偉大なるばあさん）であるという点である。ラオ族は自分の祖先および救世主であるこの老夫婦を毎年正月と10月に祀る。アハム寺院内にはこのプニュ・ニャニュの仮面が箱に入れられて保存されており、上記の時期になると僧侶とは別にシャーマンによる祭祀が執り行われるという。

・マノローム寺院

マノローム寺院はランサーン王国建国後、第二代サムセン・タイ王時代（14世紀末頃）に建立された寺院である。様々な堂宇が立ち並ぶ中、中心に位置する本堂と思われる堂宇には諸寺院と同様に外壁に仏伝画が描かれている。近年の堂宇補修によるものであろう壁画は彩色が新しく、また柱や壁、扉の金による装飾は煌びやかな物となっている。残念ながら扉が閉まっており中に安置される仏像を見ることはできなかったが、資料などによると高さ８メートルの鋳造仏が安置されており、これは制作年代が判明する数少ない典型的なスコータイ様式の仏像であるという。本堂向かって右側には住僧らの庫裏があり、ここには同じく彩色し直したと推察される仏画を背に新しい物であろう本尊が安置されていた。この場所は住僧が食事をする場らしく片隅には食器などが積まれていた。

7．むすびにかえて

以上、非常に簡単であるが現地で調査した本プロジェクトのこれまでの概要と、平成28年度プロジェクト参加経験を基として調査した成果などを中心に少しく記してみた。これまでの本プロジェクトは発足当初より問題山積みであったが、様々な機関や人々の賛同により現在の成果を得ることができたことは上記の通りである。国と国との間には様々な問題があり、それを容易に乗り越えることはまずもって出来ない。しかし弛まない交渉と行動はいずれ形作られることを希望として行ってきた本プロジェクトはようやく小さくではあるが実を結びつつあるといえよう。

ここに今までの経緯を記すことにより、さらにラオス国との友好関係が築かれ、両国の文化交流がなされることを祈念し結びとかえたい。

【事業協力機関】

・日蓮宗宗務院・ラオス仏像修復サポーターズクラブ・公益財団法人仏教伝道協会・太田慈光会・独立行政法人国際交流基金 など

追記

本稿執筆にあたり、身延山大学教授・池上要靖先生、身延山大学特任教授・柳本伊左雄先生をはじめ、多くの関係者からの助言を頂いた。又、本プロジェクトの経過資料の作成などについては身延山大学准教授・金炳坤先生をはじめ、身延山大学仏像制作修復室の研究員・研究生より提供を受けた事を記すと同時に各位に対し甚深の謝意を表する次第である。